

優生學

「復刻版」

全16巻十別冊1

第一巻第一号(大正二三年一月)

表示価格はすべて税別

B5判(第1巻)・A5判/上製/総約七、九〇〇ページ
 揃定価 本体二九六、〇〇〇円+税

(別冊のみ分売可) 本体二、〇〇〇円+税 ISBN 978-4-8350-7522-8
 誌名 名「ユージェニックス」(第一巻第一号) 第二号(第二号)

「優生學」(第二号第三号) 第二号(第四号)

発行 日本優生学会(後藤龍吉主宰)

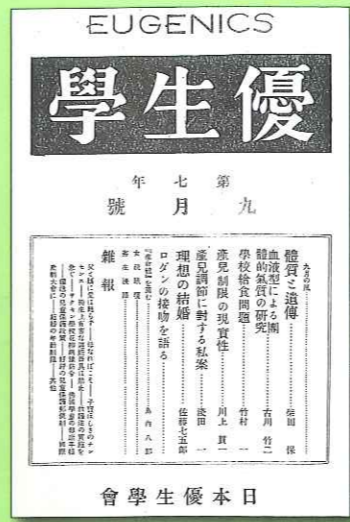
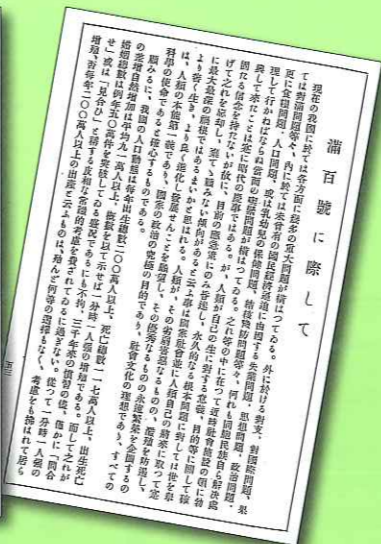
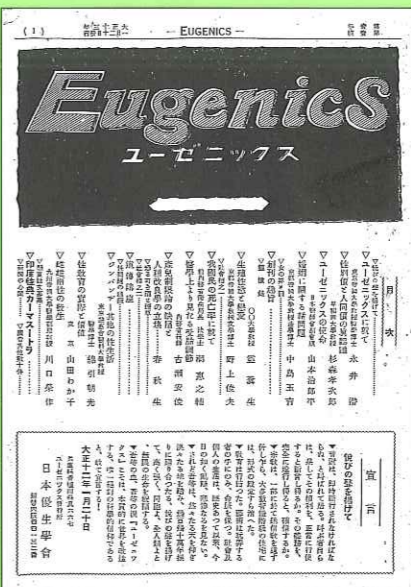
発行年月 一九二四(大正一三)年一月(一九四三(昭和一八)年四月)

別冊 解説・総目次・索引

解説 中馬充子(西南学院大学教授)

推薦 市野川容孝、笹栗俊之、鈴木晃仁、鈴木善次

原本提供 東京大学医学図書館、九州歯科大学附属図書館



優生學

「復刻版」

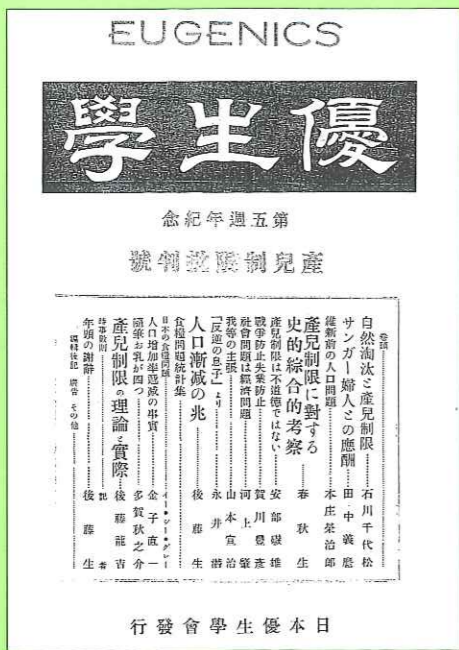
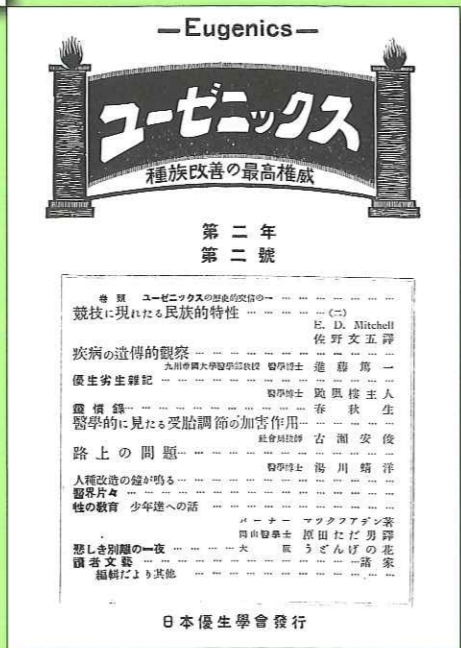
(継続前誌「ユージェニックス」を含む)

全16巻十別冊1

B5判・A5判/上製

総約七、九〇〇ページ

揃定価 本体二九六、〇〇〇円+税
 (全4回配本)

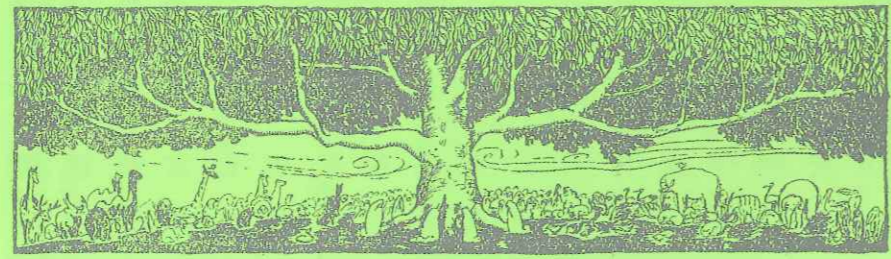


回配本	別冊	解説・総目次・索引	別冊
第1回配本	第1巻	第一号	第一〇号
第2巻	第一号	第二号	第二〇号
第3巻	第二号	第三号	第三〇号
第4巻	第三号	第四号	第四〇号
第5巻	第四号	第五号	第五〇号
第6巻	第五号	第六号	第六〇号
第7巻	第六号	第七号	第七〇号
第8巻	第七号	第八号	第八〇号
第9巻	第八号	第九号	第九〇号
第10巻	第九号	第十号	第十〇号
第11巻	第十号	第十一号	第十一〇号
第12巻	第十一号	第十二号	第十二〇号
第13巻	第十二号	第十三号	第十三〇号
第14巻	第十三号	第十四号	第十四〇号
第15巻	第十四号	第十五号	第十五〇号
第16巻	第十五号	第十六号	第十六〇号

※原本において、第一巻第一号から第五号まで「巻」が、第一号第六号(第二号を除く)から「年」が使われています。

不二出版
 〒113-0023
 東京都文京区向丘1-2-12
 電話 03-3812-4433
 ファクシムル 03-3812-4464
 振替 0016002940884

生命技術が拓く新世界を豊かなものとするためには、いかなる規範が必要か
 鋭い示唆に富む重要資料を復刻!



不二出版

復刻の辞

『ユーゼニックス』及び継続後誌『優生学』は、兵庫の医療ジャーナリストで『関西西医事』(一九二九〜四一年)を刊行していた、後藤龍吉が新たに主宰した日本優生学会の機関誌である。本誌は、一九二四(大正一三)年から一九四三(昭和一八)年まで二〇年にわたり刊行された、当時としては息の長い雑誌であった。

一九一四(大正三)年、第一次世界大戦が勃発すると、各国の政治的・帝国主義的競争が激化する。そのような歴史の中で「民族の改良」という新たな思想が生み出された。海外の動きに倣い、日本でも優生学研究体制の必要性が叫ばれるようになり、その活動をまとめるものとして、後藤は『ユーゼニックス』を創刊する。「創刊の趣意」には、「日本優生学会は、何事を為さんとするのであるか。それは生物学的に将又心理学的に、形質遺伝の法則を研究し、優劣両種族の生産消長を闡明し、人種改良の意義を確立し、進んで其目的達成に路を開かん為め、茲に先づ、公的協同の機関雑誌『Eugenics』を発刊」とある。

その執筆者は、医学博士、理学博士、法学博士、文学博士、精神科医、内務省技官、ハンセン病療養所職員、児童相談所職員などと幅広く、そのために本誌に登場するキーワードも、「遺伝」「人種改良」「産児制限」「結婚」「人口食料問題」「心理」「性」「犯罪」「障碍」「血液型」「健康」「衛生」「身体」「栄養」「児童」など実に多様である。「ユーゼニックス」及び継続後誌『優生学』は、当時刊行された数少ない専門誌の一つとして、時代をリードした広範な研究者や関連諸機関職員の考え方を取り込んだものであった。しかし、残念ながら、そこで取り上げられた思想の研究は、凡そ十分と言えるものではない。それは、全号を所蔵する研究機関が存在せず、研究者がこれらを容易に手に取ることが難しかったことにも一因している。

革新的な出生前診断(無侵襲的出生前遺伝学的検査)が本格実施されるようになり、近い将来、生命の遺伝子レベルでの選択技術が長足の進歩を遂げることが確実視される中、生命倫理に関する議論は今後さらにクローズアップされるに違いない。戦前・戦中期から今日に至る生殖操作、優生思想の「連続と非連続」を明らかにし、その歴史的展開と特質を探索するための貴重な史料として、本書を供するものである。なお、本書のとりまとめに当っては、西南学院大学共同研究育成制度による多大な御支援をいただいたことを付記し、謝意を表したい。

不二出版

内容見本

第五年第五号(昭和三年五月)

(25)



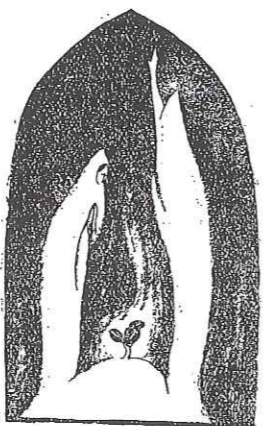
日本人の身体發育

文部省体育研究所 醫學博士 吉田 章 信

著者は日本人の身體發育の平均成績によりて民族固有性を窺ふがために、本邦諸學者の十二論文の統計的綜合及び諸外國との比較によりて初生児より滿二十歳までの各年齢に於ける測定成績を男女兩性について觀測せられた、その結論は次の如し

男女とも歐洲に於ける成績に比して劣つて居ない。(一)一歳から二歳に至る一ヶ月の身長成長量は一歳から二歳に至る間に於ける成績に比して倍である。

ける統計に同じである。しかし六歳以後三年間に於ける身長發育も男女とも少く運滞して居る。これも歐洲人に見られ第二肥満期に於ける當然の現象である。(七)發情期的身長發育促進は男一歳から二歳までの四ヶ月に現はれて居る。歐洲の多くの例に比し、男子は一ヶ月女子は二ヶ月位早期にあらはれて居る。



(19)

宇宙の萬物はすべて過去、現在、將來といふ時間的の流れの中にあつてそれに左右されて居るのであるがその中でも我々は將來といふことを最も重要視しなければならぬ、ナポレオンは常に將來々々といつてそれに根本的な意義を發見したといふが「良い子供をどうして生むか」のお話をするのもかやうな意味からである。死亡は過去の問題で生産は將來の問題であるがゆゑに健康増進の運動の上から見て生産は最も重要な問題

である、わが日本では土地食糧などの關係かららぬと消極的が私はこれにしたいと思ふ山」の言葉のから枯渇する對に繁榮を來例證をもつてでは現狀維持の後嗣を残せ兒制を主張す

良い子供はどうして生れるか

醫學博士 永井 潜

「大毎健康増進運動講演會要旨」

第七年第七号(昭和五年七月)

血液型による團體的氣質の研究

附、氣質の遺傳に就て

東京女子高等師範學校 文學士 古川 竹二

(11)



序 言 一、人の氣質に就て 二、血液型と氣質との關係 三、民族的氣質乃至團體的氣質の考察 四、民族的體質の人類學的價値に就て 五、メンケ氏の内外、外向型に對する吾人の所見 六、氣質の遺傳に就て 七、結 言

生理學研究昭和四年九月號に於て、金關助教授より「血液型と人種心性」なる題下、拙論「血液型による氣質及び民族性の研究」(昭和二年八月及び十月發表)に對し、人種學上の豊富なる資料を以て、明快なる紹介と批評とを賜はつたことは誠に感謝に堪えない。その過分なる御謙辭に至つては然しながら恐縮の外はない。唯、血液型は醫學界近時の發見であり、従つてその應用研究たる人種乃至國民に於ける血液四型の頻度の調査も眞に最近に至つて盛行はれ報告せられて居る狀況である。このことは金關氏が參考せられて居る文獻が二書共に吾人の拙論の發表と同年若くはそれ以後發行のものであることからも證するところが出来、かくの如き事情にあつたので

人種の特異性と云ふ事

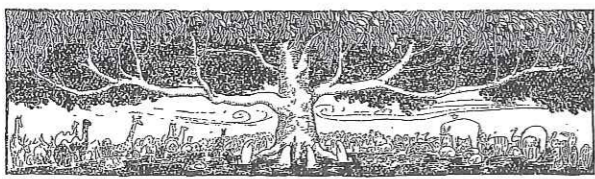
朝鮮京城帝國大學醫學部 醫學博士 志 賀 潔

重んず可きものは後者であること疑を容れませぬ。種族特異性を比較する場合に其特異性が種族固有の性質に似て居る時には之れを下等と申します。然し之れは可なり種族的のものでありまして、人間の我儘が多いのです。亞弗利加土人の眼が歐米人よりも遠距離のものを見分けられるも、鼻は長く値かな鼻氣をかき分けられるのは種族に近いから知れず、然し眼と鼻の機能から云へば遠かに土人

第六年第七号(昭和四年七月)

主要執筆者一覽

Table listing authors and their affiliations, including names like 青木延春, 朝比奈一男, 足立文太郎, etc.



優生學の本質と界限

龍谷大學教授 海野 幸 徳

優生學は如何なる性質の學であるか define しないために Eugenics の範圍とのか言ふことを理解することが能き性學とを混同してゐるが如きはそれ有害學となることが能きぬ。優生學は學にも關係があり、生理學、醫學、人口學や社會學や經濟學や心理學の範圍

けれど、優生學は究極生物學的のも違ひない。それはマラルクや、グルカが飼養動物及植物に應用せられ、そのカのパルバンクスの如き植物の淘汰改

日本の人口政策と優生学

市野川容孝

(東京大学大学院総合文化研究科教授)

優生学は、人口政策という大きな文脈で考えられるべき問題である。狭い国土で増え続ける日本人が生きていけるようにするには、どうすべきか。一つの方策は、人口増大を所与としながら、その人口が生活できる面積を広げてゆくことだった。ハワイ、北米、南米への日本人移民の送り出しもその一つだが、台湾や朝鮮の植民地化もこの方策に属する。雑誌「ユーゼニックス(優生学)」が創刊された一九二四年には、アメリカで新移民法が制定され、アメリカへの日本人移民の門戸は閉ざされた。以後、日本人はその「生命線」をアジア、特に中国大陸に見出し、一九三二年には満州事変が勃発する。優生学は、面積を広げるこうした方策と異なり、人口そのもののコントロールを目指し、場合によっては、本誌のいくつかの論考に見られるように産児制限を推奨する。

しかし、実際の人口政策は、領土を広げるか、それとも人口を減らすか、という単純な二者択一では動かない。本誌が最終的に採ったのは、領土を広げるためにも人口を増大させ、しかし同時に、その質を高める、しかも「一視同仁」という言葉とは裏腹に、日本人を朝鮮人、台湾人、中国人から種別化し続けながら、という途だったように思う。だが、この路線も一九四五年の敗戦で終焉し、日本列島はその外に送り出していた六〇〇万を超える日本人を引揚者として再び受け入れなければならなかった。そして、一九四八年に優生保護法が制定され、日本の優生政策はこの法律によって本格的に実施されるようになる。

本誌はその手前の一九四三年に廃刊されているが、二〇世紀の日本の人口政策を歴史的にふりかえるための重要な史料である。

「新しい優生学」の

到来にそなえて

笹栗俊之

(九州大学大学院医学研究院教授)

園芸植物や農作物、家畜、ペットの多くは、野生種に人が手を加え、人間にとって「好ましい」姿や味、性格に「改良」した生物である。人間の尺度に照らすと、これらは野生種より、ある「優れた」性質を持っている。しかし、少数の例外を除けば、「改良」された品種は自然環境下で繁殖し続けることはできない。それは、人間にとって好ましい性質を有するかどうかという一本のモノサシだけで優劣を測った結果である。人間の想定よりはるかに複雑な条件が絡み合う自然の中では、実際にその環境で採まれてきた野生種の方が圧倒的に強靱なのだ。

優生学は、育種技術を人に適用すれば、人間社会にとって「望ましい」人間を多く生み出せるだろうとの考えから誕生し、二〇世紀前半に盛んとなった。しかし、事はそれほど単純ではない。先に述べたように、一つや二つの尺度だけでは個体全体の優劣は測れない。だいたい、遺伝子の実体はまだ解明されておらず、当時、遺伝は概念にすぎなかった。そして何よりも、ナチの政策がもたらしたおぞましい事実を見て、優生学はいったん後退させられた。

ところが、それから半世紀以上が過ぎた今では、遺伝子の実体どころか、個人の全ゲノム情報を知ることとも可能となり、高度な遺伝子工学技術を使うこともできる。また、情報網も著しく発展し、メガデータも容易に扱える。こういう時代にあつては、高度な技術と膨大な情報に支えられ、「新しい優生学」が息を吹き返す可能性がある。

そのような事態に冷静に対処するには、二〇世紀に優生学がたどった道を正確に把握しておくことが大切である。戦前の優生学界をリードした雑誌『優生学』を復刻する意味は、そこにある。容易に参照できなかった史料を介して、優生学史がさらに発展することを願ってやまない。

『優生学』復刻版の

刊行によせて

鈴木晃仁

(慶應義塾大学経済学部教授)

二〇世紀の後半に新たに脚光を浴びた生命倫理、生権力論、社会史、医療史、科学技術論、障害学などのさまざまな学問の洞察は、優生学の歴史という領域に持ち込まれて学際的に交差した。国家にとってはマルサス以来の人口の問題の量と質の調整であると同時に、個人の生命の価値の差異を判断するという近代の人権思想の中枢に触れる問題であった。個人・当事者にとっては、性と生殖という個人の生き方の根本にかかわる問題であり、結婚と世帯の存続という家族の問題でもあった。人種や民族、疾病と障害の問題は、医学と社会の接点を鮮明に照らし出した。優生学と同時期に発達したSF文学や推理小説は、その古典的な作品において遺伝性疾患の主題を積極的に取り上げていた。

優生学は、もともとは一九世紀末のイギリスで作られた概念が世界に広がったものであり、その歴史研究は国際性を持つものであった。世界の広範な地域において、文化はもちろん政治・経済において多様な形態をとった国家によって、さまざまな違いを持つ優生学が実施されたため、国際比較の視点が重要であった。二〇一〇年にオックスフォード大学出版局から刊行された『優生学史ハンドブック』は、英米独仏だけでなく、北欧、南欧、東欧、ソ連、イスラエル、中近東、南アジア、東アジア、日本、アフリカ各地、中南米各地などを含むものである。比較の視点だけでなく、また、帝国医学や人類学による多様な地域の研究は、近現代における知識と権力のグローバルな動線を浮き彫りにしてきた。

雑誌『優生学』の復刻は、このような学際的・国際的な研究のステージに、日本の優生学史研究を運んでいく道具の一つであろう。多くの研究者によって利用されることを祈っている。

「優生学の社会運動化」を

学愛好資料復刻に期待

鈴木善次

(大阪教育大学名誉教授)

今から十四年前(一九九九年)、雑誌『優生運動』(池田林儀編輯、優生運動社、一九二六〜一九三〇年)が不二出版から復刻された。そのとき僕は推薦文に「日本の優生思想や優生運動の歴史を跡付ける上で欠くことのできない人物であり、その活動である」と書いた。申すまでもなく、「人物」とは池田林儀のことであり、ジャーナリストというユニークな立場で、ユニークな人種改良論(「遺傳」だけでなく「教育」も大切)を展開した。

今回、再び不二出版が神戸で医療ジャーナリストとして活躍していた後藤龍吉が独力で出版を開始した雑誌『優生学』(日本優生学会発行、創刊号は「ユーゼニックス」という名称、一九二四年)を復刻出版することにになった。この後藤の『優生学』は池田の『優生運動』と同様、日本における優生学の研究体制づくりやその思想普及が促された、いわゆる「優生学の社会運動化」の時期にその出版活動が展開されたものであり、両者を合わせ読むと当時の優生学に対するさまざまな立場の人たちの考えを知ることができる。実は後藤自身、『優生運動』の第一巻に「優生運動に直面して」と題する一文を寄稿している。

僕がほぼ五十年前に始めたころと比べて、こうした復刻本の登場で優生学関連の研究環境は大いに改善されている。ふたたび、「優生思想」にかかわる社会的課題が浮かび上がってきている現在、この復刻版の有効な活用を期待している。

